
男勝りなスレンダー褐色
短髪筋肉女戦士な相棒が
淫乱な巨乳色白ツインテ
ムチムチ女娼婦に調教された
基本CG22枚
全162ページ


「おーい、なにぼーっとしてんだ？」


「全く、これから迷宮に潜るって時に
寝ぼけてるのか？」
「しっかりしてくれよ？
頼りにしてるんだからさ」


「じゃ、行こうぜ？
ま、俺達なら楽勝だよな」

「う……」

目を覚ますと、見知らぬ部屋にいた
ここがどこなのかも、どうしてここで眠っていたのか
記憶があいまいで思い出せない……

「おや、お目覚めですか？」


突然目の前に現れた悪魔に対して
咄嗟に武器を構えようとして気付いた
拘束されていて、動けない……
「いきなり攻撃なんてしませんから
そんなに警戒しないでくださいよ」
「ここはどこで、お前は何者だ？」

「おや、覚えていないのですか？
うーん、ボロボロにやられちゃった
後遺症ですかね？」
「ここは迷宮の中です、ほら
よく思い出してみてください」
『……』


悪魔にそう促され
俺は自分の記憶をたどり始める
迷宮……そうだ、アイツは……
俺は確か……同じ宿で寝泊まりしてる
相棒の部屋に行って……

「おーい、起きてっかー？」

「おう、どうぞー」

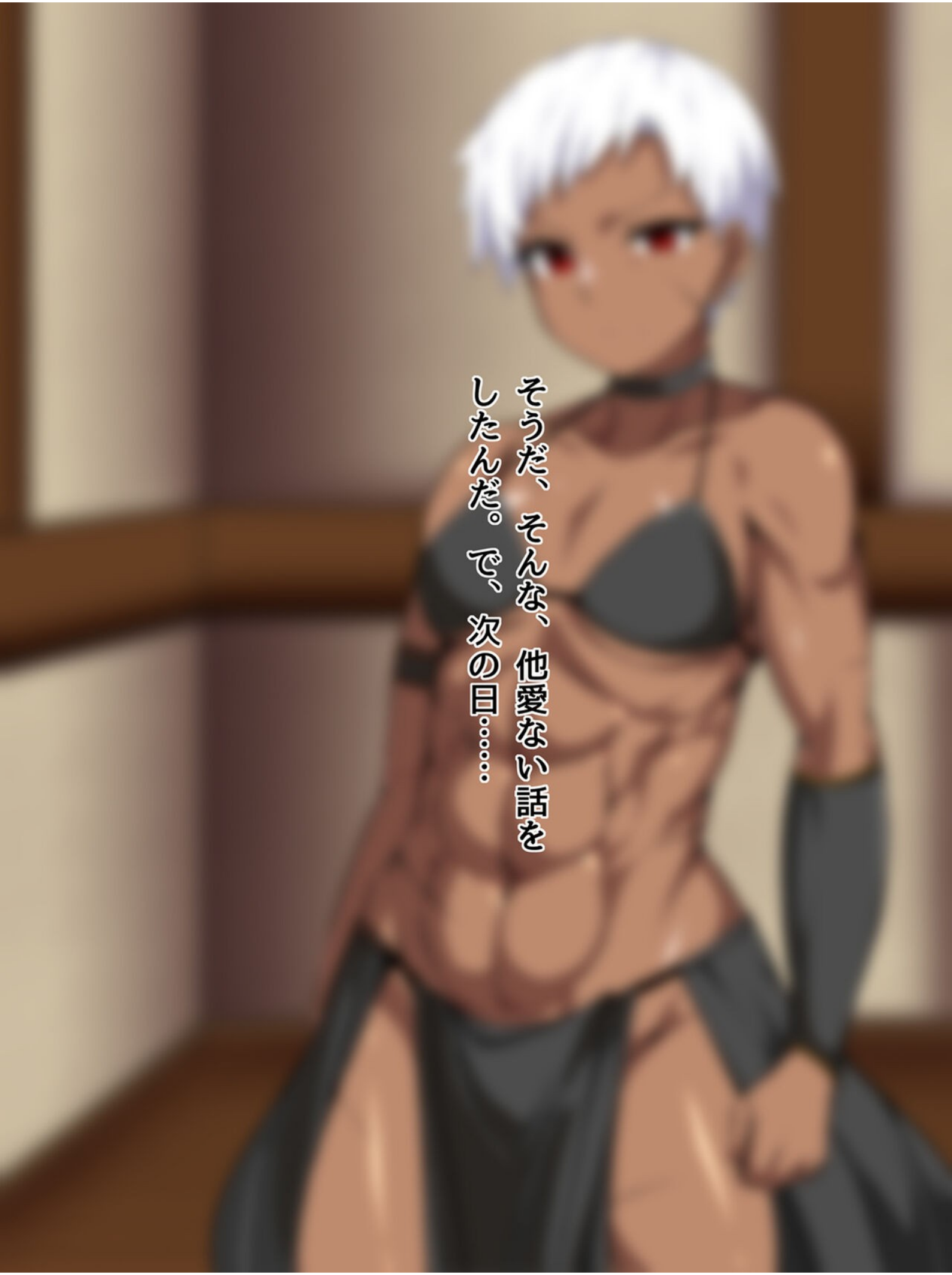

「よう、どうした？」
「おま……人を部屋に入れる時は服を着ろっていつも言ってるだろ？」


俺の相棒、アレス。見ての通り粗雑な
女だが、見ての通り腕は立つ奴だ


「あー、そうだったな、悪い」
（しかし……いつ見てもいい身体してるな……）


ちなみに、コイツの本当の名前は
アレスではなく、一文字違いの〝アリス〟なのだが
そう呼ぶと当然キレる
それでも、俺に自分の本当の名前を
教えてくれた時は嬉しかった


「ほら、これでいいか？
で、なんの用なんだよ」
「明日の準備は済んでるか？
お前は用意が雑だからな」
「なんかあったら
その時は尻拭い頼む」
「オイオイ、お前な……」


そうだ、そんな、他愛ない話を
したんだ。で、次の日……




「ここが入口か」


俺達はここらでも最難関と呼ばれる
迷宮の前にいた。
そうだ、さっき夢で見たのはこの時の事だ


「おーい、なにぼーっとしてんだ？」


「全く、これから迷宮に潜るって時に
寝ぼけてるのか？」
「しっかりしてくれよ？
頼りにしてるんだからさ」


「じゃ、行こうぜ？
ま、俺達なら楽勝だよな」


お互いを鼓舞する意味も込めて
軽口を叩きあってから、俺達は
迷宮に乗り込んだ、そして……


圧倒的な力を持つ迷宮の主である悪魔に
呆気なく負けた


動かない身体に鞭打って必死に伸ばした自分の手と
首根っこを掴まれて持ち上げられる気絶した相棒
これが、意識を手放す前の最後の光景だ


俺達は失敗したんだ……

「思い出された様子ですねぇ」
「ま、まさかアレスはもう……」
「心配しなくてもちゃんと生きてますよ♥
アリスちゃんの様子を知りたいですか？」
「あ、ああ……」


この悪魔の目的がわからない。それでも
会いたいか?と問うてきた時のこの女悪魔の
その邪悪な笑みで、俺は察するべきだった


「では、どうぞ♥」


差し出された鏡の向こうに映る光景は
俺にとっては最悪のモノだった


「ふっ、ふっ……アリスの処女マンコぎちぎちに締め付けてきて気持ちいいよ鍛えてる女は違うな」
「うるさい……っ黙ってやれ……」
「恥ずかしがる事はない。本当は私に一目惚れしたんだろう?その証拠にこうして大切な処女までくれたじゃないか」
パイコンレ
パコンレ
パイコンレ


「くっ、こんな紋章刻んで
無理矢理服従させておいて…よくも
そんな事を……っ」
「そして、大事な相棒を人質に
取られている。絶対服従というわけだ」
パンッ
パンッ
パンッ
パンッ
パンッ


「さぁ、初めての中出しだ
ご主人様の精液をしっかり
搾り取るんだぞ……っ」
「だれがご主人様だっ、くそっ
絶対に倒して……」
ドチュッレ
ドチュッレ
ドチュッレ
ドチュッレ
ドチュッレ
プルンッ
プルンッ


「うぁあぁあっっ！」
ビクッ
ビクッ
ビュルルルッ
ガク
ガク


「はあ、はあ……っ
な、なんだ……今の感覚」
「淫紋の効果だよ」
「それは人間に服従を強いる術だが
同時に人間を淫乱に変えていくんだ
外見的、内面的共にね」
ハァ
ハァ
ハァ
ビクン
ビクッ
ビクッ
ドクン
ドクン
ドクン
ズクン
ズクン
ズクン


「そしてその力は私の精液を
注がれるとより強くなる」
「今味わっている感覚は
淫紋が効力を発揮している証」
ドクン
ドクン
ドクン
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクン
ビクン
ビクン
ハァ
ハァ
ハァ


「アリスちゃんがエロエロな女の子になっちゃうのが楽しみだ」
「ふざけるな……こんなもので自分を失ってたまるか……！」
「ヒヒヒ……その意気だ
寧ろそうでなくては楽しくない
最後にどうなるか、楽しみだね」
ドクン
ドクン
ドクン
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ハァ
ハァ
ハァ
ズクン
ズクン
ズクン


相棒が受けた屈辱的な仕打ちを見て
俺の怒りは一瞬で沸点を超えた

「お、お前らよくもっ！！」

「ふふふ、こわーい♥」


がむしゃらに暴れるが、がっちりと
施された拘束は俺をその場から動く
事を許さなかった


「クソっ！！絶対許さねぇぞ！」
「初日からこんなに怒っていたら
持ちませんよぉ？」


「調教はまだ
始まったばかりなんですから♥」


「始まったばかり」
その言葉に青ざめる
俺達が入ってしまったのは
まさに出口のない迷宮だった


「さぁアリス、今日も
娼婦になる為のお勉強をするんだよ」
「……俺をその名前で呼ぶな」
「ふふ、威勢がいいのは結構だが
相棒君の命とその淫紋、この二つが
ある限り、君に拒否権はない」
「くっ……勝手にしろっ！」


ハヴッ
ハヴッ
ハヴッ
「では遠慮なく、ふぅうぅぅっ」
「う、くっ……っっ！」
（な、なんだこれ……昨日と
感覚が違う……っ？）
ズニュウッ


「っ、はぁっ、はっ、はぁっ…
ま、まて……っ
何か、変な感じが……んっ♥」
「その感覚はアリスの身体が私の
モノに馴染んできている証拠だ
これからどんどん気持ちよくなるぞ」
「うそだっ、こんな、あっ♥」
パンッ
パンッ
パンッ
パンッ
パンッ

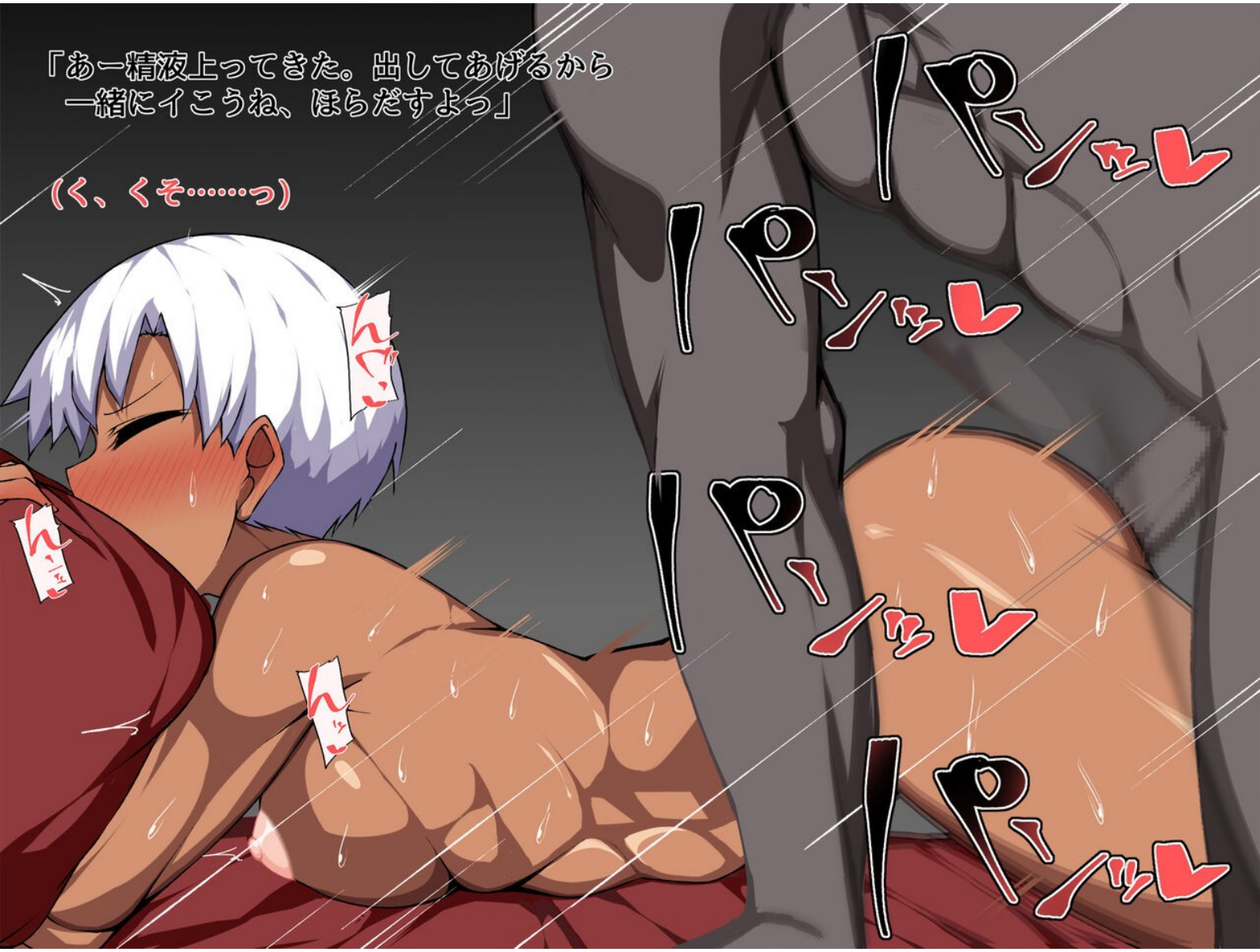

ドクッ
ドクッ
ドクッ
ドクッ
「何かが身体から湧き上がってくるね？
それが絶頂、イくと言う事だよ」
「ヒヒ……さぁ、ご主人様と
一緒にイキなさい。可愛くイクところを
ご主人様に見せるんだ」
「うあぁっ、くそっ、誰がそんなっ
そんなところ、見せたくないっ♥
やめ、あ、あ、あぁっ♥」


ビュルルル


ビクッ
ビクッ
ビクッ
ズクン
ズクン
ズクン
「初めての絶頂はどうだった？」
「はぁ、はぁ、はぁ……♥」
「惚けて返事もできないか。けど
まだまだ休ませないよ。たくさん
イキ顔を見せてもらうからね
「や、やめ……あぁあっ♥」


「ん、ふぅ、んぐっ……っっ」
「一生懸命枕かみしめて
感じるの我慢してるのかな
ふふふ、好きにするといい」
「そういう娘をわからせるのも
嫌いじゃないからね」
ズッポッ
ズッポッ
ズッポッ
ズッポ


「ほら、声が漏れちゃってるよ？
気持ちいいのかな？気持ちよかったら
声出してもいいんだよ」
「ふーっ、ふーっ♥」
ドチュッレ
ドチュッレ
ドチュッレ
ドチュッレ


「あー精液上ってきた。出してあげるから
一緒にイこうね、ほらだすよっ」
（く、くそ……っ）
パンッ
パンッ
パンッ
パンッ


ドビュルッ
バッカンッ
ドビュッ
ビュクッ


「ふー……っ♥ふー…っ♥」
「頑張って我慢したのに
いっぱいイってしまったね
可愛かったよ」


「アリスちゃん、あっさりイカされちゃいましたね」
「外道が……っ」


「こわーい♥そうだ、一つ良い事を教えてあげましょう
ご主人様はあれで飽きっぽい方なんです」
「いつまで経っても、自分に惚れこまない
女性に対してはその内興味を失ってしまうんですよ」
「アレスちゃんがご主人様に心を許さなければ、
いずれは貴方ともども捨てられるでしょうね
つまりそれは、この迷宮からの解放という事です」


それは一筋の光明だった
耐えきれば、解放される……
アレス、なんとか、なんとか耐えきってくれ…！


（ま、それもなるべく長く楽しむ為のスパイスでしかないんですけどね）


悪魔の責めは
自分から手を出す事にとどまらず
アレスに自信への奉仕を強要させ始めた
断れば俺に危害が加わると脅され
アレスは従う以外の選択肢がない
俺は自分で自分を手にかける事も
出来ず、ただ彼女が耐えきるのを
祈るしかない


ギン
ギン
ギン
ビキ
ビキ
ビキ
「さぁ、教えたとおりにやるんだ
上手にできないと……わかってるね？」
「わ、わかったから
相棒には手を出すな」


ちゅっ
ん……
ピクッ
「ん……ちゅっ」
「そう、まずは先っぽに愛情込めて
キスするんだ。言った通りにできて
偉いね」


ヌプ…ッ
(お、大きすぎる……口の中に
入りきらな……っ♥)
「そうだ、全部咥えこんで
口の中でご奉仕するんだよ」



「口すぼめて、頭を前後に動かして
チンポをしごくんだ、あぁ、上手いよ」

(くそっ、人質さえ取られて無けりゃ……
こんな、こんなものを……♥)

「出してあげるから、全部飲むんだ。いいね」



「んんっ！？」

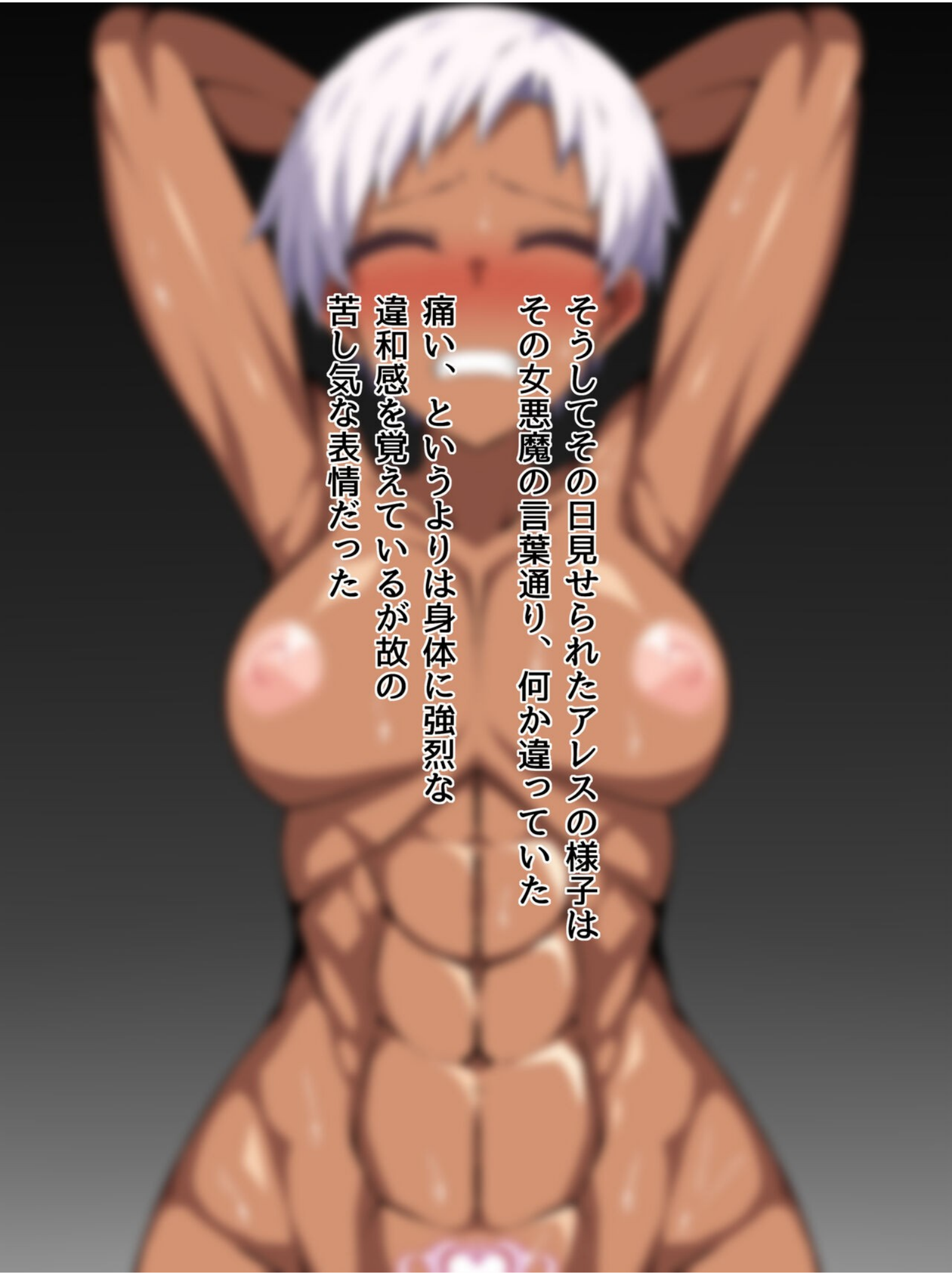
「こぼさずに全部ごっくんしなさい」

「ん……コクッ、コクッ……♥」


「上手にできて偉かったね
ご主人様の精液はどうだった？」
「こ、こんなもの、不味いに
決まってるだろ……♥」
「その割には顔がうっとりしてるね
本当は美味しかったんじゃないのかい？」
「そんな……♥そんなわけないだろっ」


「アリスちゃん、いっぱい精液飲まされちゃいましたね
これまでのエッチで子宮に出された量と合わせると……
ふふ、そろそろ面白いものが見られると思いますよ♥」
「貴方もそろそろ退屈してきていたでしょう？
楽しみですね♥」


誰が退屈なんてするか…と言い返す気も起きなかった
そもそもコイツは俺の言葉など聞いているようで聞いてないのだ
そうして怪しげに、しかし楽し気に言った
女悪魔の言葉の意味を、俺は翌日知る事になる


そうしてその日見せられたアレスの様子は
その女悪魔の言葉通り、何か違っていた
痛い、というよりは身体に強烈な
違和感を覚えているが故の
苦し気な表情だった


「か、身体が熱い……
オレに何をした……っ！」
「淫紋を刻まれ、体内に私の精液を
一定量摂取した女はそうなる
さぁ、早くその瞬間をみせてくれ」
ズクン
ズクン
ズクン


「あぁぁ……っ！」
ブルッ
ビクビク


「あぁぁ……っ！」
ブルブル
ビクビク


「ヒヒ……素晴らしい。女性らしい身体になったなアリス」
「な、なんだこれ……！戻せ、戻せよ……！」
「何故そんなことをする必要がある？こんなに素晴らしい身体なのに」
ムギュ
ムギュ
ムギュ


「あ、んっ♥さ、やめ、触るなっ♥
んぁあぁっ♥」
「感度も抜群。やはり君には素質がある
これからはこの胸で私を楽しませてくれ」
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ


「はぁ、はぁ……あっ
くううぅ……っ♥」
「どうしたのかな？何かを
必死に我慢してるけれど」


「ここをじんじんさせて
ここから、なにか
でそうなんじゃないか？」
「っ……」


じわ…
「染み出てきたね
我慢しなくていいんだよ
ほら、だしてごらん」
「い、いやだ……っ
そんな事……」
「またそんなに意地を張って。
素直になれる様に手伝ってあげようね
ほら、いくよ？」
たぱ、
たぱ、


ビクッ
ピュッ
ピュッ
ピュッ
ビクッ
ビクッ
メスイキ!!


ビュッ♡
ビュッ♡
ビュッ♡
ビュッ♡
「上手に母乳出せたね
偉いよアリス」
「っ……♥……♥」


「あは……アリスちゃん
ぴゅっぴゅって母乳出しながら
イっちゃって可愛い♥」
「ちなみにあのおっぱいは
アリスちゃんの〝強さ〟から
できてるんですよ」


「貴方達風に言うと、ミレベル ミですかね？
ああやって出しちゃう度に
彼女はどんどん弱くなっちゃうんです」
「これからどうなっちゃうのか
楽しみですねぇ」
『……』

アレスの容貌は、まるで悪魔の好みに作り替えられるかのように
少しずつ変わっていく。

それだけの時間が経っているのか、もしくは早くそうなる様、何かしらの術を
施されているのか……、ただ見る事しか許されない俺には確かめる術がない


「ん……んむ…っ、ちゅ……」


「ぷは……」
「さぁ、教えた通りに言ってごらん」
「……今日も、アリスの事を
たくさん可愛がって下さい」


「よく言えたね、偉いよ。そんなに
私の寵愛が欲しいんだね」
「っ……お前が言えって……！」
「ほら、また品のない言葉遣いに
なってるよ。言いつけを守れないと
君と、彼がどうなるか言ったはずだよ」


「……申し訳、ありません」
「素直に謝れて偉いね
じゃあ、まず今日はこの
敏感オッパイを使わせてもらおうか」


「あぁ、最高だよアリス
君のおっぱいは極上の一品だね
「ありがとう、ございます……」
（こんなのの、何がいいんだ……）
むにゅ
むにゅ


「もっと胸を寄せてチンポをしごくんだ、やってごらん」
「っ……こうですかっ」
「あーそうだ、上手いよ上手にできて偉いね」
ズッ
ズッ
ズッ
ズッ


「もう出ちゃいそうだよ
ちゃんと精液オッパイで
受け止めるんだよ」
「は、はい……っ」
たぷ
たぷ
たぷ
たぷ


「あっ……で……」
ビュクッ
ビュクッ
ビュルルッ


「っ……こ、こんなに……」
「アリスのオッパイが気持ちよくてたくさん出てしまったんだよ」
だらぁ……


「そうそう、騎乗位というのは
そうやって腰を振るんだよ」
「ん、ふっ……くぅ…っ」
「夢中で腰振って感じてるんだね
やはり戦いなれた戦士は
セックスの上達も早い」
「これは……
命令するから……っ」


「意地っ張りな所も
嫌いじゃないよ」
「ほら、イキそうになってるの
自分でわかるかな？」
「教えた通りイク時は
ちゃんとイクって言うんだよ」
「く、っ……イ、イキま……」


ダメぇ!?
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ


「うっとりメス顔して、そんなに
気持ちよかったのかな？」
「でも、言いつけは
守れなかったね。これは
お仕置きしないといけないな」
ピクッ
ピクッ
ピクッ
ピクッ
キュン
キュン
ガクッ


「ま、まって……イった
ばっかりだから、今入れられたらっ」
ビチッ
ビチッ


ビクッ
ビクッ
ビクビクッ
ズンっ…
「おっ、ほおおぉおお……っ♥♥」
ビクッ


ドゴッ
ドゴッ
ドゴッ
ドゴッ
ドゴッ
ドゴッ
ドゴッ
「また言えなかったね。お仕置き続行」
「おっ♥だめっイキました、イキましたからぁっ♥」
「後から言ってもダメだよ。
ほら、チャンスを上げるから頑張って」


「マンコ締まってきたよ
ほらなんていうんだっけ？」
「イきますいきますっ、またイくっイくっ」


ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビュルルルルル
ビュルルル
ビュッ
ビュッ
「イっっっぐうううううぅっ♥♥♥」


ほー！
ピクッ
ほー！
ピクッ
ピクッ
ドクッ
ドクッ
ドクッ
「ほー……っ♥ほーっ……♥」
「ちゃんと言えて偉いね。これからも
ちゃんと忘れずに言うんだよ」


「よく似合っているよ。
さて、ご挨拶をしてごらん」
「アリスは、ご主人様の忠実な性奴隷です
このやらしい身体で、旦那様の情欲を
今日も思う存分発散してください」


「男を悦ばせる言葉もしっかり覚えたないいだろう。今日はまずケツ穴を舌で舐めしゃぶって貰おう」
「……はいご主人様のお尻の穴……アリスのお口で清めさせていただきます」


ペロペロ
レロッ
レロッ
レロッ
「んっ……ちゅっ」
「れろ、ぴちゃ、ぴちゃっ♥
ん、れるるるるっ♥♥」


「ケツ穴の奥もちゃんと舌で
キレイにするんだ」
「ふぁい……♥」
ぐぷぷっ ぐぷっ


「そんなに顔をうっとりさせて
ケツ穴舐めさせられて興奮してるんだね」
「う、うっとりなんて、してません
こんな事、屈辱です……っ」


ドキッ
ドキッ
「そろそろ射精そうだよ……
ほらアリス、ご主人様の精液を
無駄撃ちさせるつもりかな？」
「は、はい……最後はしっかり
お口で搾り取ります……」


「それでは、失礼します……♥」
ドキ
ドキ
ドキ
ギンッ
ギンッ


「んっ♥んっ♥んっ♥んんっ♥」
「そんなに夢中になって
むしゃぶりついて。余程
咥えたかったのかな」
ズッ
ズッ
ズッ
ズッ


「アリスの可愛いひょっとこ顔見てたら
もう出そうだ、全部飲むんだよ」


「んんっ……ん、んっ…
こくっ、コクッ♥」
ビクビクビクビク
ゴクッ
ゴクッ
ゴクッ

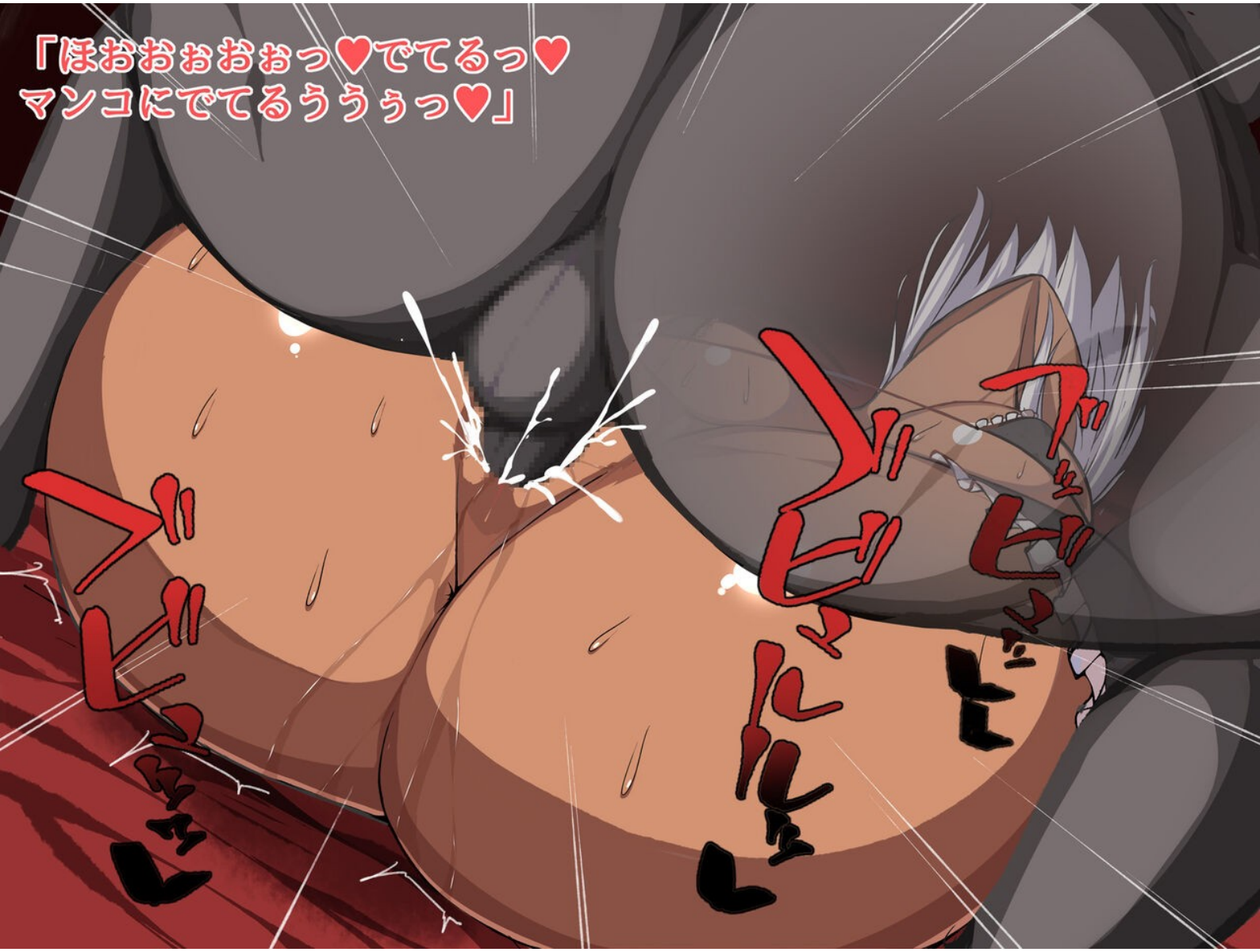

「ふー……♥ふー……♥」
「きちんとごっくんできたね。
上手くできた娘にはしっかり
ご褒美を上げようね」


「もうとろとろじゃないか
そんなに待ち遠しかったのか？」
「ち、ちが…そんなこと」
「遠慮しなくていい、
ほら、チンポ入れてあげるからね」
はぁ
はぁ
はぁ


「おおおおオォッ♥
おっきいの入ったっ♥」
「入れた途端に締め付けてきたな。
フェラチオさせられて
オマンコ準備始めちゃってたのかな？」
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ズッポッポ
ヌッチュ


「これが欲しかったんだろう？
膣内をデカチンポで擦られるの
大好きだもんね」
「やめっ、おおおぉっ♥」
ぱんっ
ぱんっ
ぱんっ
ぱんっ


「あーでる。精液出してあげるから
ちゃんとマンコ締めなさい」
「はいっ♥はいいっ♥」
ドクッドクッ
ドクッドクッ
ドクッドクッ


「ほおおぉおぉっ♥でてるっ♥
マンコにでてるうぅぅっ♥」
ブビビビ

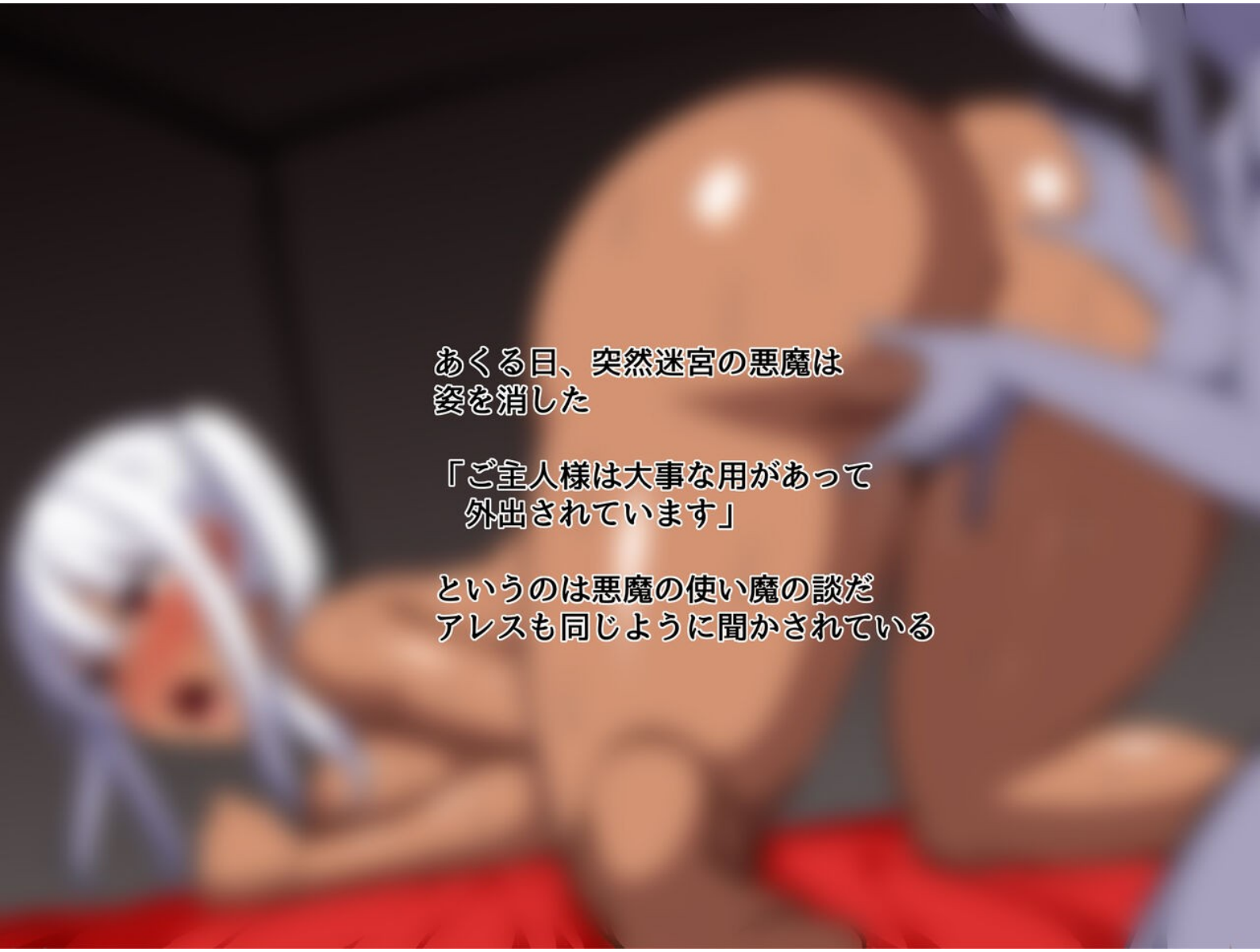

「休んでいいなんて誰が言った？」
「ま、まってっもうほんとに
げんかい……イいいいいっっ♥」

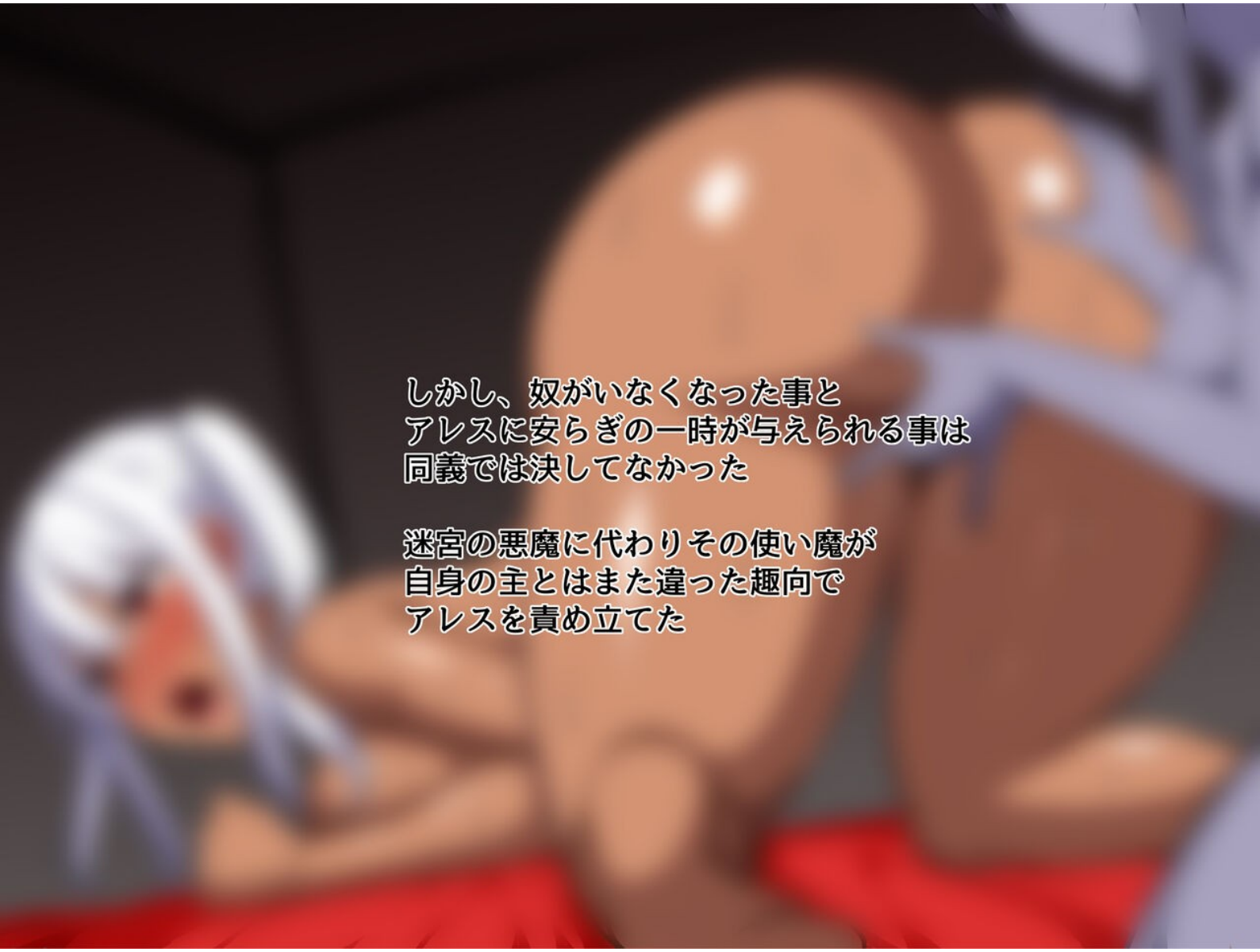

「いくらでも気持ちよくなって
構わないが、ご主人様を満足
させるのを忘れてはいけないな」
「ごめんなさいっ♥ごめんなさっ
オあ゛ ああぁっ♥♥」
パン
パン
パン
パン
パン


「好きなだけイクといい、アリスがイクところ
ちゃんと見ててあげるからね」
「イキますっ♥イっ、インッインッ♥♥」
ズチュッ
ズチュッ
ズチュッ
ブルンッ
ブルンッ
ブルンッ


「イッッグウウゥゥッッ♥♥♥」
ビクッ
ビクッ
ビルルッ
ビルルッ
ビクッ
ビクッ


「ふー……ほら、奴隷の嗜みを
忘れてるよ？セックスが終わったら
ご主人様になんていうんだ？」
「ほー…っ♥ほー……っ♥中出し……♥
ありがと、ございました……ぁ……♥」
ドクンッ
ドクンッ
ドクンッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ


あくる日、突然迷宮の悪魔は
姿を消した
「ご主人様は大事な用があって
外出されています」
というのは悪魔の使い魔の談だ
アレスも同じように聞かされている


しかし、奴がいなくなった事と
アレスに安らぎの一時が与えられる事は
同義では決してなかった

迷宮の悪魔に代わりその使い魔が
自身の主とはまた違った趣向で
アレスを責め立てた


「く……っ、ふぅ、ふぅ
はぁあぁ……っ♥」
「イキそう？イっちゃいそうなの？」
「あ、あぁあ……イ、イく……っ♥」
ビクッ
ビクッビクッ
ビクッ
ビクッ
グイッ
グイッ
グイッ
グイッ


「はーい、だーめ♥」
「え……っ」
「勝手にイっちゃだめですよ？
アリスちゃん♥」
ピ

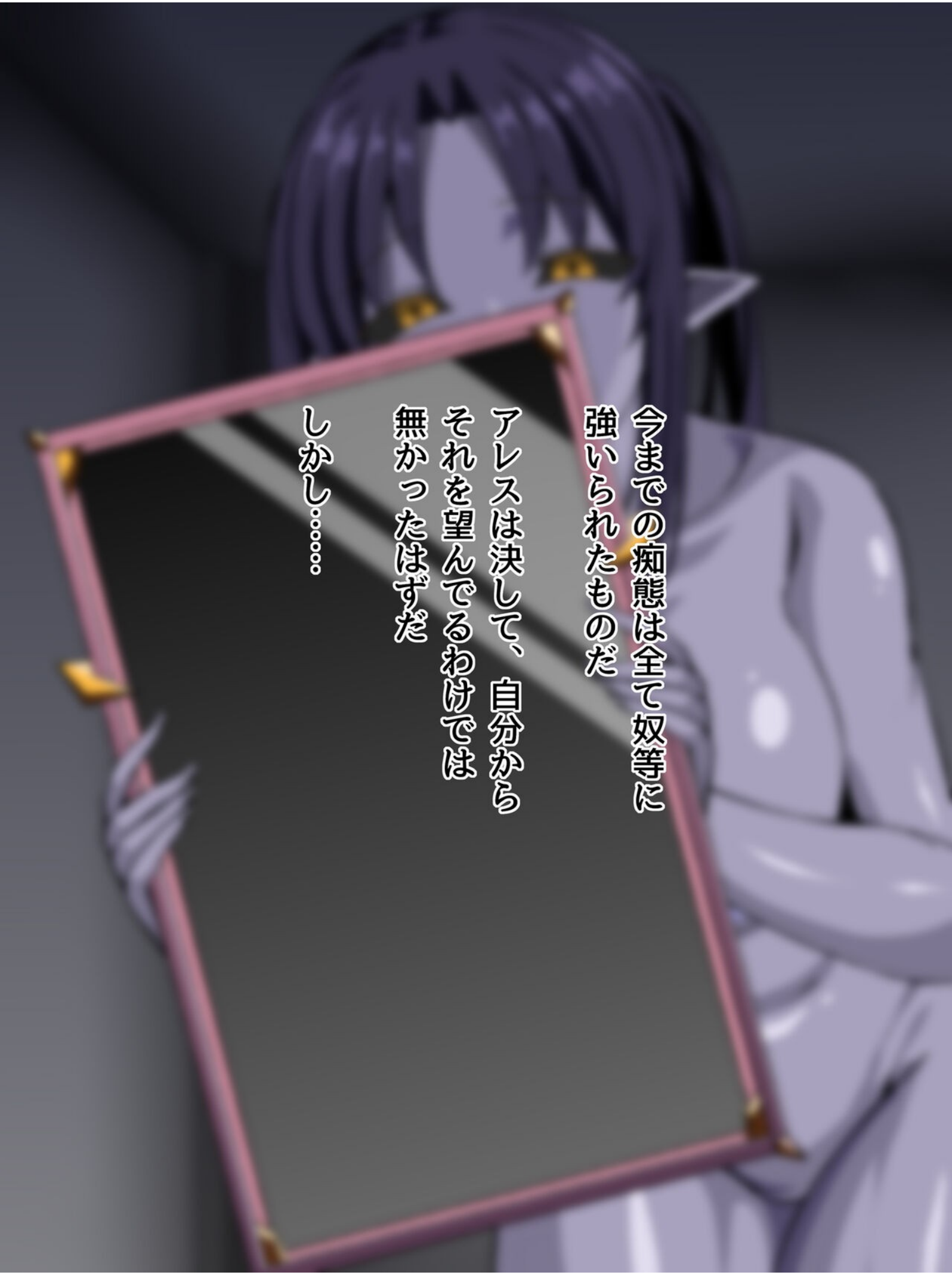

「な、なんでこんな……」
「んー？ふふふ、アリスちゃんが
とっても可愛いから♥」
「い、意味が分からない…っ
今まで散々情けない姿を
晒させておいて……っ」


使い魔はアレスの快楽の度合いを巧みに
コントロールして焦らし、
その情欲を発散させる事を許さない
これがコイツの趣味趣向なのか


「どうでした？焦らされて
悶々しちゃってるアリスちゃん
とってもかわいかったでしょ」
「随分悪趣味なんだな、お前」
「ふふ、半分正解、半分不正解です
アリスちゃんがイケないのは私が
そうしたからじゃありません」


「彼女はもう、そういう身体になっちゃってるんですよ♥」


「な……」
「その証拠に……ほらアリスちゃんの様子を見てみましょうか」


今までの痴態は全て奴等に
強いられたものだ
アレスは決して、自分から
それを望んでるわけでは
無かったはずだ
しかし……


「う、うぅ……はぁ、はぁ♥
あ、あっ…あんっ♥」
ハァ♥
ハァ♥
ハァ♥
ハァ
ハァ
ハァ
グニュ♥
グニュ♥
グニュ♥
グニュ♥
グニュ♥


「あっ、イ、イく……イっく……♥」
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ガクッ
ガクッ
ガクッ
ガクッ
ガクッ


「はぁ、はぁ……♥
ダメだ……イケない
あと少し、なのに……」
「やっぱり……
アレじゃないと……」
ピクッ
ピクッ
ハァ
ハァ
ピクッ
ピクッ
ヌッ
ヌッ
ヌッ


「自分から気持ちいい事
しちゃってるアリスちゃん
可愛いですね♥」
「でもほら、私が言った通り
全然満足できてないでしょ？
「今までの調教で、もうそういう
身体になっちゃってるんです」


「アリスちゃんを唯一
満足させられるのは……
なんだかわかりますよね？」
「明日にはご主人様
帰ってきますからね♥」


「やぁ、ただいま
元気にしていたかな？」
「あ……っ♥」
「嬉しそうな顔をして可愛いじゃないか
そんなに私に会いたかったのかい？」


「そ、そんなわけ……ない
二度と顔を合わせくなかったです」
「そうだな。自分を辱めた怨敵に
まさか、会いたがって何かを
求める者などいる筈がない」
「っ……」


「しかしなアリス、私は君に
会いたくてしかたなかったんだよ」
「……嘘です、そんなの」
「本当さ、ほらその証拠に」


ドキッ♥
「ほら、ご主人様のチンポだ。ずっとこれを待ってたんだろう？」
「あっ！♥♥あ、あぁ……♥はっ……♥はっ……♥はっ♥」


「アリス、今日はお前の
新たな門出の日だ……フフフ」
《ほ、ほしい……これっ♥
これほしいっ♥チンチンほしいっ♥》
「……」


「ほら、今からこれが
アリスの中に入るんだよ」
「ふーっ♥ふーっ♥」
「もう待ちきれないか
よしよし、大きいの入れてあげような」


ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
「おおぉおぉおっっ♥♥」


ピクッ
ピクッ
ホー
ホー
ホー
ピクッ
ホンッ
ホンッ
ホンッ
「挿入されただけで
イってしまったか。まぁ
仕方ない事だな」
「ほー……っ♥ほー…っ♥」
「大丈夫だぞアリス、
今日は君が満足できるまで
とことん付き合ってやるからな」


パチュンッ
ブルンッ
「どうだ？久々のチンポの味は
私とのセックスの快楽を
再確認できるだろう？」
「きもちいい……っ♥気持ちいっ♥
チンチンッ♥チンチンきもちいっ♥」
「なら私の性奴隷になると誓え
この快楽を好きなだけ享受できるぞ」

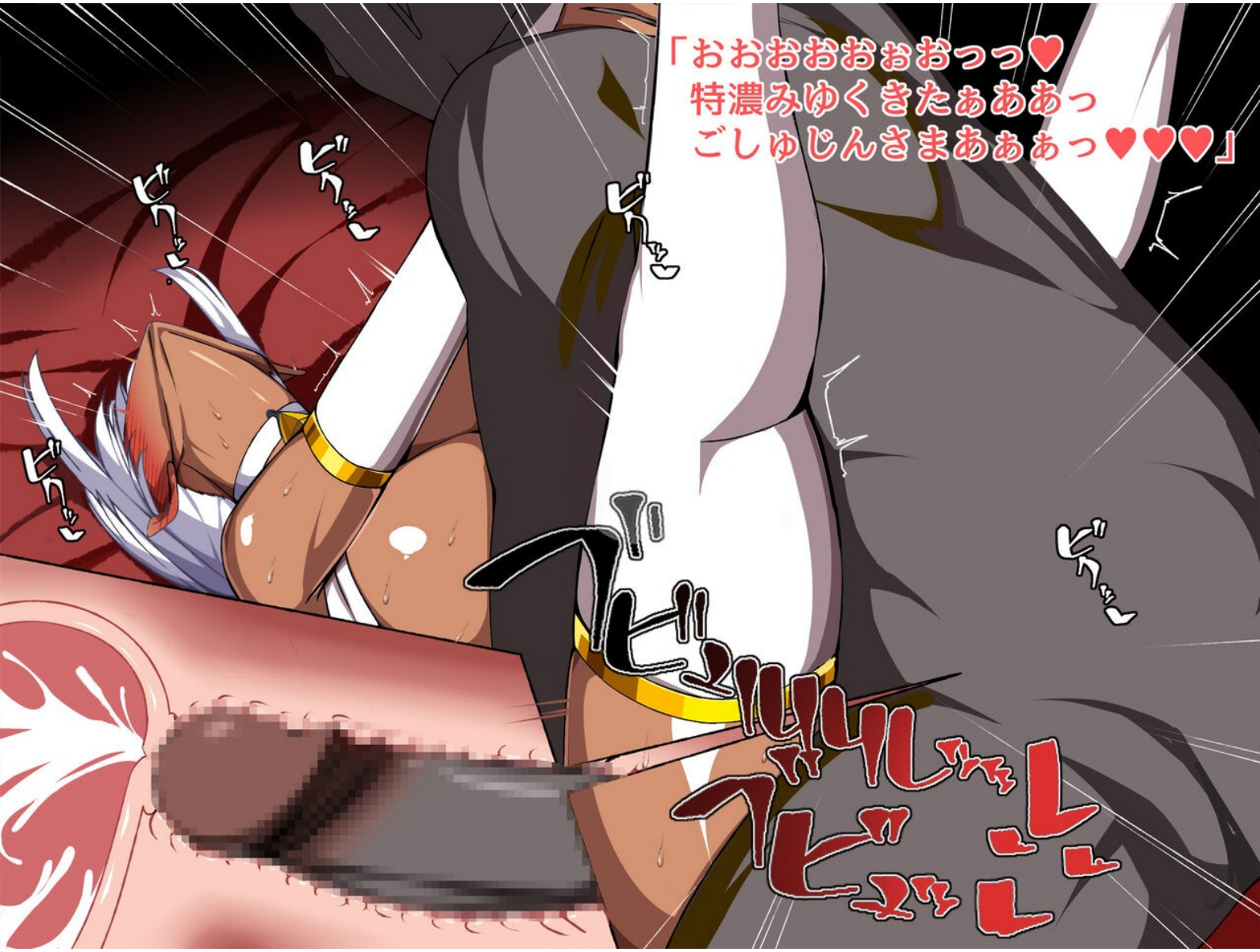

ズンッ
ズンッ
ブチュッ
ブチュッ
ブチュッ
ブチュッ
ズンッ
「それはっ……それはぁ……っ♥
アリスは、俺は……っ相棒とっ」
(だろうな。強情な女戦士には
自分への言い訳が必要なものだ
最後の一押しをくれてやろう)


「生涯私に尽くすと誓うなら
お前の相棒を開放してやってもいいぞ
それも無傷でだ」
「え……っ」
「ほ、本当…ですか…？」


「二言はない
お前の意志の強さに
敬意を表し私も譲歩しよう」
「あ……あぁ…っ♥あぁぁっ♥」
ドクンッドクンッ
ドクンッ


「この快楽こそお前が
この迷宮で手に入れる
最高の宝だ」
「おおっ♥激しっ♥
チンポズンズンキクッ♥
キクぅっ♥」
「さぁ宣言しろっ、
自分の心に正直になれば
相棒を助けてやるぞっ」
パンッ
パンッ
パンッ
パンッ


「な、なるうっ♥なりますっ♥
ご主人様の奴隷になりますっ♥
生涯お仕えしますぅっ♥♥」
「よく言った、
褒美をくれてやろう
奴隷の証だ受け取れっ」
「くださいっ♥
エロメス奴隷マンコにッ
ドピュドピュしてくりゃさいっ♥」
ドチュッ
ドチュッ
ドチュッ
ドチュッ
ギシッ
ギシッ
ギシッ


「おおおおおぉおっっ♥
特濃みゆくきたぁあぁっ
ごしゅじんさまあぁぁっ♥♥♥」
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ブビッ
ブビッ


ビクンッ
ビクッ
ビクッ
ギュ…
ドクンッ
ドクンッ
ドクンッ
「これからは私に尽くせ、いいな」
「ごしゅじんさまぁ……♥♥」


「あっ……♥気持ちいいっ♥
ねえご主人様っキス♥
キスしたいっ♥」
「ああ、好きなだけ
キスしような」
ズッ
ズッ
ズッ
ズッ
ズッ
ズッ


「ごひゅじんひやま……♥
れろっ♥じゅぷっ♥れろれろれろっ♥」
チュパ チュパ
レロン レロン
パン パン
パン パン


『はっ♥はっ♥はっ♥
イキそうれすっ♥イク♥
イクイク♥イキますっ♥』
ドチュッ
ドチュッ
ドチュッ
ドチュッ
ドチュッ
ドチュッ


「んんんんん～～っっ♥」
ブチュー
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビュルルッ
ビュルルッ
ビュルルッ

「ん、ふぅ……♡」
ボッ
ピクッ
ピクッ
ピクッ
ピクッ


「それじゃ、お別れですね」


「さ、だんだん眠くなってきますよー
目が覚めたら見知った場所にいると思うので
怖がらなくても大丈夫ですからね」


「アリスちゃんの事は心配しないでください
これからはご主人様の奴隷として
幸せに過ごしますからね」

「では、おやすみなさい♥
結構楽しかったですよ♥」

そして気が付くと俺は
迷宮の道程にある街道に立っていた
ここに送られたのだと、すぐに気付いた

アリスにはもう二度と会えなかった
そもそも会う気もなく、冒険者を続ける
気力もなかった。

完全に心が折れた俺は
田舎に帰って、静かに暮らすと決めた

風の噂で何処かの街に美しい銀髪の
娼婦が現れたと聞いたが
もう俺には関係のない話だ